

道と交通

645年6月14日政変がおこります。新政権が活動（中大兄皇子のちの天智天皇・中臣鎌足が蘇我氏を滅ぼす）、8月5日には東国に対して新政権の政治改革を発布。8組の中の3組目がここ毛野国であったようです。翌646年、政治改革としての大化の改新となります。律令制度の中ではっきりと分割されます。都に近いほうを上、遠いほうを下と位置して上毛野国（群馬県）、680年頃下毛野国（栃木県）そして武蔵野国（埼玉県）となって行ったと思われます。

蘇我氏を中心に地方を治めていた勢力が衰退し、新天皇を中心とする勢力藤原氏等が台頭する転換点となりました。

645年大化の改新から始まる新政権は、すばやい形で、当時ここを勢力圏に納めていた民族と呼応したり、追いだしたり、征東・征夷という統治方法で動き出します。

当時はまだ陸路が物流や機能性を重視したものはなく、大化の改新以降、大和政権設立に協力した功績で熊野族（くま）といわれる海運の民が海や利根川を使って交易を一手に独占して行っていたと考えられます。それを祀ったのが今でも熊野神社の名称で各地に残っているのではないかと。

上毛野国も前橋、高崎の地域の民族は陸運族、太田周辺は海運族と別れているようです。

以前より幹道建設計画はあったと思われるが672年天智天皇・天武天皇の頃に不整備であった陸路を整えようと命を下し、その一つでもある東山道築道始まります。この主要道作りは国家事業であったと考えられ、新政権は地方住民に賦役や雇用で、道路建設を行い、新国家の威光を示したのではないかと。わずか40年の短期間に九州から東国の道を整備しました。すばらしい測量技術があったこと。これは大陸からの特に新羅や高句麗の技術者の渡来があったことが考えられる。そして各所に郡衙を置き、地域を平定していきます。

古墳時代の終盤600年頃までは、海路交通を主体としていた太田南側から太田市寺井の地は人口集積があり農耕が盛んであった。そこに東山道という陸路交通、新交通システムが新時代の象徴として築道された。そして寺が設置され、郡衙、正倉も置かれる。適地として選ばれたと思われます。この3組織が並ぶこと、並んで見つかることはめったになく、現在は日本でも、ここだけと思われれます。（天良七堂遺跡、新田郡衙遺跡）

711 年平城京遷都が行われる頃になると東山道も福島県あたりまで北進してきます。上毛野国に入るその入り口のところにある多胡の碑などがそれを裏付けています。